

---

# 面倒くさがりの悪魔と薄幸元王女

廻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

面倒くさがりの悪魔と薄幸元王女

### 【Nコード】

N3471Z

### 【作者名】

廻

### 【あらすじ】

これは、やる気ゼロのおっとり悪魔と、薄幸の元王女の、仄かな『幸せ』を求める物語。この出会いは、三界、天界・人界・魔界に大きな転機を与えることになる、誰も知らず、予想もしなかった、小さな出会いの物語である。

## プロローグ（前書き）

早すぎるアンケートの結果

一位：コレ

二位：その他諸々

でした。

では、さようなら。

## プロローグ

まだ、この世界が天界と人界だったころ、大きな争いが起った。

主神への反逆。

とある熾天使セラフィムが、己の力に溺れ、傲慢になり、主神へと反逆を起こしたと、数千年後の人界の文献には載せられている。

『光をもたらす者』とまでされた、最高位の天使。翼の色を変えられ、心の臓を兄弟のような天使に突き刺され、人界よりも深く、あらたなる世界を創造してまで突き落とされた、底の底。逆三角形の世界の地の底に、六対の翼を凍らされ、再び天界へと昇ることが出来なくなつた。

太陽も月もない、妖しく輝く一つの巨星が、薄暗い夜空を永遠に照らし続けるその世界。

彼に味方して、いくつもの、名だたる天使たちが墮天した。

「……そう、か」

純白の世界などではない。雪さえ凍てつく、邪悪な色をした氷雪に覆われた世界で、一人の青年の形をした、主神の最高傑作は、静かに目を閉じる。

そうして彼は、天の使いとしての名を失い、墮天使の長となった。

数千年後、いくつもの変化を遂げた墮天使　悪魔たちによって、  
青年の身体は保護された。

黒い、ただ、黒い空間。

そこに、一つの異形と、その他大勢の異形がいた。

「ルシファー。貴様、悪魔としての誇りはあるのか」

「……さてね」

ルシファーと呼ばれたソレは、多くの異形に囲まれながらも、まったく動じず、あまつさえ欠伸さえする始末だった。

乱雑に伸ばされた黒髪をくしゃくしゃと掻き上げながら、ルシファーは周囲を見渡す。

いずれも、この魔界において権力を持つ者たちばかりだった。

「どうすれば、認めてもらえるんだ？ 人を殺せばいいのか？ 神を殺せばいいのか？ 世界を滅ぼせばいいのか？ 一体何なんだよ。俺が、一体なにしたらって言うんだ」

「天界と人界との戦争に出ない」

「悪魔として人に恐怖を振りまくべきお前が、なにをしているのだ」

膨大な魔力を吹き散らしながら、多くの異形たちはルシファーを

責め立てる。返答を少しでも誤れば、殺してしまいそうなほどに。

「別に……俺は、ただ毎日日向ぼっこしてるだけだけど」

「貴様……ッ！！」

ルシファアのそんな怠惰な返答が癪に障ったのか、多くの異形たちが殺気立つ。それでも、ルシファアは表情一つ変えない。

それもそうだ。彼は、この魔界でも力の序列は並ぶこと無きトップレベル。彼自身が、人に災厄と恐怖を振りまく主として振る舞うのならば、周りにいる異形たちのほとんどは彼の下に着くだろう。

だが、そんな彼の性格は悪魔に相応しくない。

「俺は、さつさと戦争なんてやめればいいと思うよ。そんなの面倒臭いだけだろ」

くあつと欠伸をしながら頭をぼりぼりと掻き繕る。まったくもってやる気とやらが感じられないのだ。

しかし、そんな彼の言動がさらに異形たちをまくし立てる。

そんな悪魔たちの怒りが限界突破しようとした時、一つの声が降り注いだ。

「まあ、待てよ。そいつが悪魔なのは確かだ。なら、もっとも基本的なことやってもらおうぜ」

「……サタンか。基本的なこと？　なんだよ、それ」

サタンと呼ばれたルシファアと同じぐらいの年格好をした黒髪の青年は悪戯そうに破壊的な笑みを浮かべながら、

「人間を墮とすんだよ」

それは、悪魔としては一人前になれるかどうかの試験的な意味を持つものだった。

人間と契約する。それも、魂の契約だ。そのために、相手の心に潜り込み、腐敗させ、瓦解させる。

「出来るかな？　るーしふあーくん？」

挑発しているのは分かる。別に、これに乗る必要など微塵も無いのだが、今日が乗ったというべきか。

やはり、ルシファーは面倒臭げにサタンに視線を向けると、

「いいよ、やってやる」

「オーケー。ノリの良い奴だ。ほら、基本的なことも分かっちゃいない、るしふあーくんのために墮としやすそうな人間、見つけといてやったぜ？」

用意周到な奴だ、と心の中で悪態をつく。大方、数年前からこうなることを予見して、人間を墮ちやすくしていたのだろう。

「相手は、没落王家の最後の生き残り。可哀想に、たったの十七歳で親も親戚も、全ての繋がりをぶち殺された、憐れな憐れな元王女様だよ。まあ、オレがそうなるように周りを操作したんだけどなあ？」

サタンはそのことを思い出しているのか、薄ら気味悪く、くつくつと笑いだした。悪魔の中の悪魔、と評されるだけのことはあるか。

悪魔の最も根本的な部分である、『悲しみを喜ぶこと』が最も顕著である。

ルシファーはというと、なんだか微妙な表情になっていた。

「……女かよ」

女は、苦手なんだよ。

そう呟くと、サタンが持っていた紙をふんだくり、早々とその場を去ってしまった。

それを見送るサタンの目は、やはり悪戯っぽく破壊的な笑みを浮かべていた。

人間界の、とあるボロ小屋には、薄汚くも小奇麗な少女が住んでいた。

生まれつきの魔法の素養。そして、元王家として培ってきた数々の教育のお陰で、村の人たちに助けを借りながらも一人で生きていけた。

だが、過去のことはいつまでたつてもぬぐい去れない。

突如として、周囲の貴族たちが反旗を翻し、王族に対して革命を起こした。それに国民たちも賛同し、国にはいられなくなった。

一人、一人と……。王族に味方をしていていた人間達が裏切っ

ていく恐怖と悲しみ。

一人、一人と……。家族や親戚が殺されていくトラウマ。

そんな数々の悲劇に苛まれながらも、彼女は身分や名前を変えて、ひっそりと暮らしていた。もう一生、歴史の表舞台には現れることは無いだろうと知りながら、ただ、平穏を求めて生きていた。

そんな彼女の今日は、いつも通り、小さいながらも、痩せた畑を耕すこと。先日収穫した旬の野菜は痩せた土地ながらも、美味しく実ってくれた。

今回は次の作物を育てるために、畑を耕すのだ。

「ああ、それと、ギルドに行つてカードの更新に行かなくちゃ」

薄汚れた布団の中で銀色の瞳をぱちちりと開けた少女はそのまま身動き一つ取らず思考を働かせる。

彼女は今日一日の計画を頭の中で練っていく。

それがここ数年の彼女の日課となっていた。

そして、漸く今日一日のスケジュールを頭の中にまとめると、その質素なスケジュールに若干笑いが零れる。

しかし、それは諦めの笑いでもないし、自虐的な笑いでもない。

ただ、今日も一日頑張ろうと、たったそれだけの笑いだった。

がばつ、と銀色の髪を、寒くなり始めた季節の変わり目の朝に舞わせ、ささつと布団の中から起き上がった。

手作りの不格好なチェストの中から黒い紐を取り出し、それで腰まである銀髪を頭の上で一つにまとめると、「よしっ！」と掛け声を上げて立ち上がった。

朝ご飯を食べるだけの余裕が彼女の家計には無いので、きゆるきゆると情けない悲鳴を上げるお腹を勇気づけながら作業着に着替える。

そして、誰に言うでもなく、「いつてきます」と閑散とした部屋に向けて言った。

ドアを開け放つと、冷たい外気が彼女の体を引き締めた。ぶるぶると身体を震わせ、急速に冷めた指先を吐息で温めながら、靴を履いて外に駆け出した。

はずだったのだが。どんっ、と何かにぶつかる。

それは温もりのあるものだったので、村の悪戯っ子が設置したブービートラップなどではないことは確かだった。

まさか、魔物？ と若干の恐怖を混ぜながら、一歩二歩と後ずさった。

彼女の住んでいる村は魔物が結構な頻度で出没する場所で、そのたびに男衆たちが鍬などで追い払っていた。

まさか、魔物？ と二度目の思考をしながら、彼女はゆっくりと顔を上げた。

そこには、黒髪黒目のぼんやりとした青年が突っ立っているだけだった。これでも毎日の畑仕事でそれなりには鍛えている身体だ。線の細そうな男にぶつかり負けることは無いと思ったのに、と。そんなことを考えていると、その青年が声をかけてきた。

「セリア・ノースホワイト。俺と契約して、『幸せ』を掴め」

ぶつきらぼうなその言葉に対して、元王女、セリア・ノースホワイトは、

「け、契約したら、畑仕事、手伝ってくれますか？」



## プロローグ（後書き）

作者は宗教の知識を半端に持って、半端に調べたそれを、自分なりに解釈しています。なので、伝承系統に違和感を覚える方もいらっしゃるでしょうが、そこはご指摘お願いします。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

## 第一章：幸せ

ヨルド村。亡国に属していた国だが、その国が瓦解したとき隣接していた国へと接收された、小さな村である。特産品は、村近郊で採れる『メーヌシロップ』。とろりとした液体で、口に含めばほんのりとした花の香りと、甘い味で、広い世代に人気な品物だ。

その他は、大体が農業従事者およびギルドの冒険者。鋤を振るいながら、片手間に冒険者として小金を稼いで生活している、といったものだ。

その村に、朝方　大きな地揺れが起った。

ズドンッ！　ズドンッ！　と、まるで巨大な魔物が近くを闊歩しているかのような地揺れが、断続的に延々と続いた。

その中心点には、一人の黒髪の青年がいた。

「おい、『耕す』というのは地殻が見えるぐらいまでやってもいいものだったか？」

振り上げた鋤を、亜音速の速さで振り下ろす。叩きつけられた畑は、まるで地中が爆発したかのように盛り上がる。鋤全体を強固な魔力で覆っているからこそ、出来る芸当だった。

だがしかし。

「だ、だめですっ！　ちょ、ちよっとすとつぷー！」

鍬が振り下ろされるたびに、足が地面から数十センチも浮かんでいた少女の方はと言うと、慌てふためき、舌つ足らずな感じで、青年を止めに入った。

ようやく、静かな朝が村に戻ってきた。

「力加減が分からなかったが、まあ、いいだろう。地面もいい具合に掻き混ぜられたみたいだしな」

「わー、よかったです……じゃないです！ えっと……クマさん？」

「なんでそうなるんだ」

「え、えっと……最初会った時、クマの魔物かと思ったから……」

「……………」

失礼な奴だ、と青年は思った。

だが、まあ、魔物が比較的頻繁に出没する場所で、百九十センチに近い男とぶつかれば、誰でもそう思うか、と納得させた。

それにしても、名前か、と青年は首を捻る。

まさか、自らあの名を名乗って、上手くこの女の心を落とすことが出来るわけがない。

しかし、いつまでも考えているわけにもいかなかった。少女からは、不思議そうな視線がこちらに注がれている。

エル。そう、思いついた。

「エルだ。セリア・ノースホワイト」

「えるーさん？」

「いや、長音は使わず、エル、だ。セリア・ノースホワイト」

「え、えっと……エルさん、その、フルネームで呼ばれるのは、ちよっと」

「なんでだ？」

「な、なんとなくなんですけど……」

銀髪の少女      セリアは、おどおどとした様子で青年      エルに  
応える。

頬を赤らめ、何か言いたそうにもじもじとしている。何度かこちらの顔を窺っては来るのだが、口を開こうとはしなかった。

「じゃあ、なんと呼べばいい。セリアか、ノースホワイトか」

「せ、セリアで。ごめんなさい……」

「なんで謝るんだ。自分が悪くもないのに」

「い、ごめんなさい。癖が、ついちゃって……」

「癖？」

「えっと……理由は言えないんですけど、いろいろあって、わたし、ずっと謝ってて……それで、えっと、ごめんなさい」

エルとしては、その程度の秘密など人界に来る時点で、すでに調

査済みだった。

サタンに自分の身の回りの環境を限界まですりきらせた後に待つのは、地獄だったに違いない。

「……まあ、いいさ。俺に同情する資格なんて、全く無いしな」

「し、資格？ な、なんのこと」

「なんでもない。セリア、苗を植えるのは手伝わなくていいのか？」

「え、えっと……よろしければ、手伝わってください」

おずおずと、痩せた大地にも根を深く張る芋系の苗をこちらに差し出してくるセリア。エルは、「話の逸らし方を間違ったな」と苦笑いを零しながらその苗を受け取った。

空には、銀色に輝く太陽が頂点にまで昇っていた。

「え、えっと……そういえば、エルさん、契約ってなんですか？」

時間が昼過ぎになり、セリアの空腹も手伝って、二人は少し遅めの昼食をとることになり、村にある小さな食堂に来ていた。

そこでセリアが、「手伝っていたいたお礼に、その、お昼ごはん

んを」と言ってきたので、エルはすぐさま、「いや、いい」と切り返した。あの程度のことでは、軽い運動にすらなっていない。

セリアが温かいスープを満面の笑みで啜っているのを横目で見てみると、彼女はふと何かを思い出したような顔になり、最初の言葉を呟いたのだった。

「……さあな。俺も、よくわからない」

「え？」

「……まあ、お前が断れば、すぐに済む話だ。お前が俺を拒絶したら、俺はさっさと帰るさ」

エルは面倒臭げに欠伸をかきながら、じわつと漏れだしてきた涙をぬぐい、ぼやいた。

「俺だって、よくわからないんだ。ああ言われても、どうすればいいかなんてわかるわけ無いだろうが」

「え、えつと……」

少しいら立っているのを敏感に感じ取ったのか、エルの顔を下から窺ってきた。

「ああ、気にするな。というか気にしないでくれ」

「じ、ごめんなさい……」

だからなんで謝る、と苦笑いを浮かべようとしたが、そうすればまた、「ごめんなさい」と謝られることは目に見えていたので、口

をつむぐ。

エルとしたら、さっさとこの女を幸せにしておさらばしたいところなのだが　どうやら、まだまだかかりそうだった。

「セリアは、幸せってなんだと思う？」

「ふえ？　幸せですか？　いきなり難しいことを聞きますね」

セリアはスープをすすりながら、うーんうーんと悩む。どうやら随分と腹が減っていたらしく、エルの質問よりも食事に気がいつているような気がする。

だが、うんと言つと。

「普通が一番ですよ。朝起きて、一日の計画を頭で建てて、髪を結つて、畑を耕して、お昼ごはんを食べて、村の皆さんとお話して、ときどきギルドの依頼なんかをこなしたりして、疲れた体を布団に放りだして、なにも考えずに眠れるような、自分が今幸せだと感じる必要の無い毎日、かもしれません」

「……だったら、お前は」

セリアは、儂げに笑う。

顔に持って行ったスープの器をぐぐつと傾けて、喉を鳴らして飲みほした。

ことん、とその空になった皿を机の上に戻すと、もう一度儂げに笑って、

「はい、幸せです」

言葉は、見つけなかった。

そうか、と、それだけ。

「じゃあ、エルさんは？」

「は？」

「エルさんにとっての、幸せは？」

「俺が、幸せ？」

木のスプーンを皿に引つ掛けて遊ぶセリア。  
そう言えば 俺の幸せって、なんだろう。

まあ、探す必要は、あまりなかった。

「日向ぼっこが出来れば、それでいいさ」

「……………ぷっ」

「……………笑ったろ」

「いえ、吹いただけです」

「それを笑ったって言うんだ！」

「ごめんなさいー！」

その日、食堂から、幸せそうな一組の男女の音が響いた。

## 第一幸・幸せ（後書き）

遅れてしまった。

どれもこれもがっこうのほしゅうのせいだー（棒

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3471z/>

---

面倒くさがりの悪魔と薄幸元王女

2011年12月30日01時48分発行